

学修履歴を中心にしたOPPAによる実践的力量形成 —山梨大学教職大学院の事例—

The Formation of Teachers' Practical Skills and Abilities by OPPA Focusing on Students' Learning Records:
The Case of School of Professional Development for Education of Yamanashi University

(研究者教員)	酒井 厚*	東海林 麗香**	進藤 聡彦**
	SAKAI Atushi	SYOJI Reica	SHINDO Toshihiko
	谷口 明子***	寺崎 弘昭*	長瀬 慶来**
	TANIGUCHI Akiko	TERASAKI Hiroaki	NAGASE Yoshiki
	中村 享史**	平井 貴美代**	堀 哲夫**
	NAKAMURA Takashi	HIRAI Kimiyo	HORI Tetsuo
(実務家教員)	雨宮 亘****	川村 直廣****	嶋田 一彦****
	AMEMIYA Wataru	KAWAMURA Naohiro	SHIMADA Kazuhiko
	仙洞田 篤男****	瀧田 二三雄****	穂原 桂**
	SENDOUDA Tokuo	TAKITA Fumio	HAGIHARA Katsura
	早川 健**	藤森 顕治****	
	HAYAKAWA Ken	FUJIMORI Kenji	

要約：教職大学院の目的は教師としての実践的力量形成にある。まず、実践的力量形成の課題を、学修の変容と成長の把握、指導と評価の一体化、自己評価能力の育成の三点に絞って明確にした。それを踏まえて本教職大学院で実践的力量形成のために用いられているOPPA（One Page Portfolio Assessment：一枚ポートフォリオ評価法）の概要を考察した。また、その中で行われる三種類の評価、ポートフォリオ評価、パフォーマンス評価、自己評価について検討するとともにOPPAの基本的コンセプトについて詳述した。また、学修者のメタ認知の能力を高める思考や認知過程の内化・内省・外化とOPPAの関わりについても検討を加えた。最後に本教職大学院で用いられている三種類のOPPA、二年間を通して用いる形式、全授業科目の中で用いる形式、教育実習の中で用いる形式の具体的実践事例を示すとともに考察を加えた。

はじめに

わが国において最初の教職大学院が設置されて5年が経過した。周知のように、教職大学院は、これからのスクールリーダーを育成することを目的としている。そこでは、大別しすぎるきらいはあるが、学校経営面および授業研究に関する面の指導的役割を果たすことが求められている。

指導的役割を果たすために必要とされるのは、抽象的であるが実践的力量、言い換えるとスクールマネジメント、カリキュラムマネジメント、ティーチングマネジメントに関わる資質・能力といふことができる。教職大学院に在学しているストレートマスターおよび現職教員のどちらにも求められているのは、それぞれの経験に応じた実践的力量の形成と向上である。

本学教職大学院も設置後3年目を迎えている。設立当初から、実践的力量形成と向上のために、大学院担当教員が院生に意図的に働きかける独自のシステムをカリキュラムに位置付けてきている。

* 教育支援科学講座 ** 教育実践創成講座 *** 附属教育実践総合センター **** 教育実践創成講座客員教授

**** 元教育実践創成講座客員教授

そこで、本稿はそのシステムの背景にある考え方および具体的内容を紹介し、教師としての実践的力形成のための一助としたい。

I. 教職大学院における実践的力形成の課題

多くの教職大学院で、教師としての力形成のために日々さまざまな取組が行われている。ここでは、多くの場合、実践や活動を振り返って見直しを行うという省察（本稿では内省）という言葉が多用された取組が行われている。しかし、そのような取組が行われていたとしても、院生に具体的にどのように働きかけているのか、院生の何がどのように変容したのか、またそれらを具体的にどのように把握しようとしているのかに関しては課題が多いと考えられる。

ここでは、それらの課題全てについて検討することはできないが、以下の三点に限って簡単に検討してみたい。

1. 学修の変容と成長をどう把握しようとしているかに関わる課題

一つめは、院生の学修や活動に対してその変容と成長をどのように見取っていくかという課題である。いくら省察が大事であるといっても、学修や活動のあとでただ振り返りをさせてレポートを書かせているだけでは、何がどのようになぜ変わったのか、またそれがどのような意味をもっているのかを自覚させることは難しい。さらにまた、院生の実態に対して何をどう働きかけたらよいか明確になっていない。

学びや活動の変容や成長を自覚するためには、その前提となる状態、過程、到達点などの状態が明確になっている必要がある。このような必要性から、多くの場合、ポートフォリオ評価が導入されている。しかし、周知のように、この評価では情報量が多すぎて全体像が見えにくいという欠点がある。

こうした課題を解決できる具体的な方法は、未だ提案されてきていない。

2. 授業における指導と評価の一体化による実践的力形成に関わる課題

二つめは、実践的力形成のためには、院生の現在の状態を把握し、それに対して適切な働きかけを具体的にを行う必要がある。これは授業科目、教育実習の双方においてそれが求められている。簡単にいえば、指導と評価の一体化ということになる。

そのためには、院生の出発点はもちろん、学修や活動の過程において教師の働きかけとその成果を確認することが重要になってくる。何に対してどう働きかけるのかが明確になる具体的な方法が求められているのだが、これに対しても適切な提案はほとんど見受けられない。

また、実践的力形成の程度を把握するためにはパフォーマンス課題などにより、院生が具体的に取り組んでみた結果から判断することが望ましい。この点についても課題の解決には至っていないと考えられる。

3. 実践的力形成に必要とされる自己評価の能力の育成に関わる課題

上の1で省察のことにふれたが、これには院生自身の自己評価が重要な役割を果たしていると考えられる。つまり、学修や行動の改善には、自己の何が不適切であり、何をどう変えることが必要なのか、それは時間を要するか否か、目的達成の方法に不備はないか等々を適切に把握するためには自己評価の能力が必要不可欠になってくるのである。こうした、自己評価能力を育成するための適切な方法に関しても具体的な提案がなされてきていない。

本稿では、主として上記三点を意識しながら、課題の解決に迫っていこうとする取組の一端を紹介したい。

II. 教師の実践的力形成のための OPPA のコンセプト

上であげた課題を克服するために本大学院で用いている一つの方法が OPPA (One Page Portfolio Assessment:堀、2009 ; Hori, 2011)である。日本語に訳すと一枚ポートフォリオ評価法になる。OPPA は、院生が受講する科目を例にとれば、学修する科目ごとに一枚の用紙を用いて、授業前の本質的な問い、学修履歴、授業後の本質的な問い、学修全体の自己評価を書かせるよう設計されたものである。

2002 年に著者の一人である堀が開発し、これまで校種および教科・科目を問わず用いられてきている。この名前からすると、OPPA は評価だけを対象にしている印象を与えるが、後に詳しく検討するように、決して評価だけを対象にしているのではない。

OPPA は、まず OPP シートを作成することから始まる。そこで、本章では、OPP シートの基本的構造について説明し、その後、具体的な機能について検討する。

1. OPP シートの基本的構造

本大学院において教師としての力形成において重視しているのは、以下の考え方である。その考え方とは、受講生の既存の知識や考え方を明示化し、学修によって何を学んだのかパフォーマンス課題により確認するとともに、かつそれを受講者にフィードバックすることによって熟考させる、さらにそれらの変容をポートフォリオとして確認し、最後に既存の知識や考え方が学修によりどう変容したのか全体をふり返り自己評価するというものである。

こうした一連の考え方をカリキュラムの中心に位置付け、入学時および 1、2 年終了時、各科目の授業時、教育実習時の中で、それぞれシートを作成し活用している。このことに関しては、後に III で詳しく述べる。

OPP シートの基本的構造は、表 1 に示したように学修前・後の本質的な問い、学修履歴、自己評価から構成されている (表 1 左欄参照)。なお、表 1 の構成要素を実際の授業科目に使用したシートは図 3 を参照されたい。

表 1 OPP シートの構成要素とその内容

構成要素	OPP シート構成要素の内容		
学修前の本質的な問い	授業科目全体を通して、学修前・後の変容を押さえるために、教師が最も押さえたい要点を学修前に問う。学修後と同じ問い。		
学修履歴	授業の最重要点を学修者が毎回記入		感想・質問
	月 日	授業回数分の学修履歴を学習者が記入し、教師がコメントを加える。学修者の内省を促す。普通は 15 回記入	授業の感想や質問があれば記入。
学修後の本質的な問い	授業科目全体を通して、学修前・後の変容を押さえるために、教師が最も押さえた要点を学修後に問う。学習前と同じ問い。		
自己評価	学習前・中・後を比較し、何がどう変わったのか、変わったことに対してどう思うのかなどを自由に記述。学修者のメタ認知能力の育成を促す。		

OPP シートの学習前・後の本質的な問いは、大学院の当該科目において教師が一番押さえたいことを問いの形にし、その変容から理解状況と指導の適否を判断したりする。次に、学修履歴は文字通り学修の履歴を記録するものである。しかし、学んだこと全てを記録するのではなく、当該科目などで学んだ中で「一番大切なこと」を記録する。また、感想や疑問があればそれに関して書く欄

も設けている。

最後に、学修全体を通して何がどう変わりそれに対して自分はどう考えているのかを自己評価させる。このことにより学ぶ意味や必然性、自己効力感を引きだすことをねらっている。また、学修による具体的変容を可視的に振り返らせることによって何がどう変わり、今後どのようにすればさらに適切になるかなど、自己を的確に見取り、方向付けを考えていくという能力を育成する働きかけを行っている。

OPP シートは、大学院の講義や実習を受けている受講生がそのシートの中に記録した内容を教師が確認しつつ、コメントなどを通して資質・能力を高める働きかけを行うとともに、受講生がそれについて自分の学修を再考するなどの活動を促すとともに、教師はそれを指導や評価に活用するために作成されている。それを一枚のシートの中で行おうとしているところに特徴がある。

つまり、OPPA は、学修者の実態把握を基にして教師の指導目標の達成状況を把握するとともに、次の学修に働きかける形成的評価を行うことはもちろん、教育内容の改善、学習者の資質・能力の育成に資することを目的にしている。

2. OPP シートの中で行う三種類の評価

上で述べたことを評価の枠組みで説明してみると、OPPA では、一枚の用紙を用いてその中で三種類の評価を行っている。

一つめはポートフォリオ評価である

二つめはパフォーマンス評価である。

三つめは院生自身が行う自己評価である。

以下、それぞれについて具体的に説明する。

(1) 学修の過程や変容を明確にするポートフォリオ評価

ポートフォリオ評価は、すでに多くの教職大学院で取り入れられている。大学院では、ふつう二年間をかけ多くのことを学ぶ。その過程や変容を適切に評価するためには、ポートフォリオ評価が適している。

しかし、学修の過程にはきわめて多くの情報が満ちあふれており、何でもかんでも集めてそれを有効に活用しようとする、これが結構むずかしい。もちろん、院生にはその中から何が重要な情報であるのか取捨選択する能力が求められているのだが、多忙を極めるわれわれ院生の指導にあたる教師には院生が取捨選択した内容の適否を判断することが困難であるといえる。

そこで、OPPA では、これ以上簡単なものはなく、しかも学修後にその全体像を構造的に把握できる究極のポートフォリオ評価をねらったのである。繰り返しになるが、一枚の用紙を用いて学習前後の状態および変容を明確にする「本質的な問い」、学修過程では「授業における一番大切なこと」のみを学修履歴として表現させ、それらの総体を自己評価させるのである。

(2) 学修者の獲得した資質・能力を可視化するパフォーマンス評価

院生は、カリキュラムの科目や実習を通してさまざまな力を付けていくことになる。そこで求められているのは、さらなる力形成のために、どんな力が獲得されたのか確認し、必要に応じて教師が適切な働きかけを促すことである。たとえば、授業の科目において、それを受講した院生の何がどうなっているのかを知るためには、学修内容を適切な形で可視的に外に出させ（外化）、教師がそれを確認する必要がある。つまりパフォーマンス課題とその評価の必要性である。

教職大学院においてきわめて重要な課題になっている一つに、ストレートマスターと現職教員の

質の違いに対して授業をどう構成するかということがある。つまり、両者には最初から力量の差があり、同一内容の授業ではさらなる力量形成は難しいのではないかという指摘である。われわれはこのような指摘に対して、OPPA により、十分ではないにしてもある意味でそれを克服することができると考えている。それは、たとえ同じ授業を行ったとしても、OPP シートに書かれている院生の学習履歴に対して一人一人に教員がコメントを書くことにより個に応じた指導が可能になっているからである。

OPPA は、たとえば学修履歴において「授業の一番大切なこと」を書かせるようになっている。これは、一種のパフォーマンス課題といえる。つまり、教師が授業の中で一番伝えなかったことが学修履歴として適切に表現されているかどうかをみることになる。この内容は、適宜、以降の授業にも活用されていく。

ここで、パフォーマンス評価に求められているのは、学修者が書いた内容に対する指針や基準、いわゆるループリックの必要性である。この点についてはシラバスの作成段階において授業実施者間で十分に討議を重ね、ストレートマスターおよび現職教員双方の到達基準を明確にしている。また、授業実施者は、授業を行う場合に、これだけは押さえない、わかしてもらいたい等々の目標を必ずもっている。つまり、学習者に書いてもらいたい学修履歴の「授業の一番大切なこと」は、すでに教師には明確になっているのである。われわれは、それがループリックに匹敵していると考えている。

(3) 学修の見通しと振り返りを行う自己評価

ストレートマスターおよび現職教員の双方に求められているのは、自分自身の教員としての力量を適切に見取り、現状認識に立脚し考え判断するとともに、計画を立て、行動し、軌道修正を行いながら適切な結果を導いていく能力である。そのために必要になってくるのが学修者自身による自己評価の能力である。

多くの教職大学院において、学修者に学修や実習の振り返りを行わせ、自己評価を行っている。それ自体は重要な働きかけに違いないが、そこには注意しなければならない二つの問題がある。

一つめは、学修の前提が何であり、またどこにあったのかということである。振り返りを行うということは、とりわけ学修の場合はその根拠や前提が必要であると考えられる。それがそのままに行われる振り返りは、以後の学修に生きるようにはならない。OPP シートにおいて、受講前の本質的な問いにおいて知識や考えを明確にするのはそのためである。

二つめは、上記の前提を踏まえない単なる振り返りは、学修による変容が明確にならない点である。学修により自身の何がどう変わったのかということをも可視的に把握することは、院生といえども、もちろん重要であり、われわれ教師自身も押さえていなければならない。

これまでに行われてきた自己評価は、多くの場合、単なる振り返りにすぎないので、自己を適切に評価することが不可能になっていた。つまり、適切な自己評価が行われるためには、学修の前提がどうなっているのかを学習者自身が把握し目的意識をもって学修に臨むことが重要である。これまでに行われてきた自己評価は、その点が不十分であったと考えられる。

ところで、OPPA には、その基本的構造の中に三つの自己評価が内在している。

第一は、学修前・後の本質的な問いに対する回答の変容に対するものである。OPP シートの本質的な問いは、学修前・後において同一であることを原則としている。それは、学修による変容および成果を明確にするためであり、またそのことに気付かせるためでもある。

第二は、学修者と教師のやりとりである思考や認知過程の内化・内省・外化を適切に機能させることによるものである。これは、OPP シートの学修履歴を通して行われる。この思考や認知過程の

内化・内省・外化は、学修や授業により、刻々と変化していく自己を見取り、それに対して学修の意味付けを促す自己評価といえる。

第三は、上記二点を含めた学修全体を通した自己評価である。学修全体を振り返り、何がどう変わったのか、変わったことについて自分はどう思うのかなど、学修をモニタリングし意味付けを促すことにより、自己評価能力を高め、さらに学修者自身のレベルに応じたメタ認知能力の育成につなげていく自己評価である。

この三者を通して、教育目標およびその達成における学修者と教師の異同をなくし、学修者の自己評価能力を高めるとともに学修者の可能性を高めていくのである。そのことがメタ認知の能力の育成につながっていく。

3. 思考や認知過程の内化・内省・外化

本大学院で使用している三種類の OPP シートは、ワークシートやノートとは異なっている。その大きな違いの一つが、シートを通して学修者の思考および認知過程の内化、内省、外化を適切に機能させる点である。

(1) 思考や認知過程の内化・内省・外化とは何か

学修者の物事を認識する枠組みである認知構造と思考や認知過程の内化・内省・外化の関係を示せば図1のようになる。

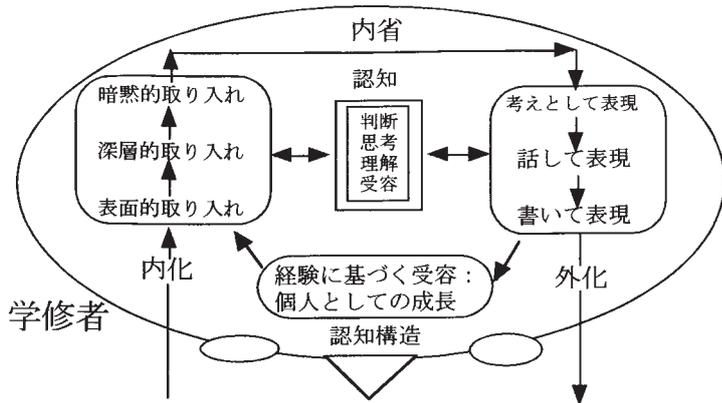


図1 思考や認知過程の内化・内省・外化と学修者の認知構造

思考や認知過程の内化とは、外にあるものを自分自身の思考や認知過程内に取り入れることである。内省とは、自分自身の考え方ややり方について意図的に吟味するプロセスをいう。ここで、内化と内省はきわめて密接な関係にあるのだが、内省を経て内化が行われるのかその逆なのか、あるいは同時に起こっているのか判断としていない。ここでは、図1に示したように、内化の後で内省が起こると考えておきたい。

ところで、外化は、簡単に言えば、学習者の内部で生じる思考や認知過程を外部に表すことである。外部に現すことは、思考や認知過程の明示化に他ならない。こうした明示化は、外界に認知結果や過程が固定化されることで記憶が保持されると同時にそれ自体を操作の対象とすることができるので、情報処理の負荷が軽減できる。

さらに、人は一般に自らの認知活動の中途結果を確認するために外化を行うが、それによって自身の認知活動の再吟味や他者との共有、新たな視点の獲得などのメリットが生まれることにつながりやすくなる。その利点を OPPA は生かそうとしている。

こうした思考や認知過程の内化・内省・外化は、学修者一人一人異なっているので、OPP シートの学修履歴に学修内容を具現化させ、それに対して教師が働きかけを行うという方法により可能になっている。

(2) 思考や認知過程の内化・内省・外化と学修および授業

思考や認知過程が外化されていると内省の対象として比較、対照、編集などの操作がしやすくな

り、内省が促進されるといわれている。また、協調的な認知活動の場では、互いに自身の認知プロセスを外化し、相互のプロセスを比較吟味することが自然に要請されるため、内省が起こりやすくなると考えられる。

このように見てくると、認知過程の外化は、自分自身の認知過程を具体的に観察可能な形にするという点において内省および内化の促進にきわめて重要な役割を果たすことになり、両者を切り離して考えることはできないといえよう。さらに、内省および内化は、自己の認知過程の吟味、調節、修正、再編成などを含んでいるので、自分の思考についての思考であるメタ認知の育成にとって避けて通ることができない。

(3) 思考や認知過程の内化・内省・外化と OPPA の関係

学修者の思考や認知過程の内化・内省・外化を適切に機能させるためには、教師の彼らに対する働きかけが重要になってくる。それを可能にするのが OPP シートである。とりわけ、OPP シートの本質的な問い、学修履歴および学習全体を振り返る自己評価は、内化・内省・外化を適切に機能させ、かつ働きかける要素であるといえる。

OPP シートは、院生自身が「授業で一番大切だと考えたこと」を外化させている。次に、それに対して教師が適切なコメントを書き入れ、院生の内化と内省を促す。さらに、それが次の外化につながっていくというスパイラルな効果を生み出すことができる。この過程は、指導に活かす形成的評価を行っているのである。

これまで、たった一枚の用紙の中で、このように思考や認知過程の内化・内省・外化を働きかけ、院生の資質・能力を伸ばす方法は存在しなかった。

(4) 学修における三つの内省

教員の資質・向上という視点から考えると思考や認知過程における内化・内省・外化の中で、とりわけ重要な役割を果たすのが内省である。内省については、これまで Schön (1983)、van Manen (1995) らの提案がある。これらを踏まえて、本大学院では、学修前・中・後の内省を予見的内省、学修中の内省、遡及的内省の三種類に分けて考えている (表 2 参照)。この内省には、本大学院で用いている三種類の OPP シートのいずれもが対応している。

表 2 思考および認知過程の内化・内省・外化と目的・方法・時期

	内 化	内 省			外 化
		予見的内省	学修中の内省	遡及的内省	
目 的 および 機 能	学修や実習による外部情報の吸収	既有知識や考えと対比し学修の見通しをもつ	学修や実習から得た内容を熟考する	学修や実習から得た内容を振り返り熟考する	学修や実習から得た内容を表現し自己評価する
方 法	二年間、各科目、教育実習で用いる三種類の OPP シート				
時 期	科目、実習および大学院開始時	科目、実習開始時および大学院入学時	科目履修および実習実施時	科目、実習修了時および大学院修了時	科目、実習および大学院修了時

本教職大学院で用いている OPPA は、表 2 にあげた三つの内省を基本としているので、それについて説明してみる。

(1) 予見的内省 (anticipatory reflection)

この内省は、これからの実践に対して見通しをもち、計画を吟味する、修正するなどを意味している。

(2) 学修中の内省 (reflection in action)

実践や活動の中で行われる内省である。途中の段階で見直しを図ったり、軌道修正したり今後の見直しを行ったりして行動を調整する働きをもっている。

(3) 遡及的内省 (retrospective reflection)

実践や活動のあと、学修全体を振り返り適切な外化を行うための内省である。

上記の三つの省察のレベルは、教育実践における複雑な場面に柔軟に対応できるように便宜的に考えており、必ずしもこれに固執する必要はない。

Ⅲ. 山梨大学教職大学院カリキュラムの骨格としての OPPA

本大学院におけるカリキュラム全体を貫く OPPA は、以下の三つの形式のものを活用している。

まず、一つめは、大学院 2 年間を通して用いられる形式である。これは、入学時、1 年終了時、2 年修了時の三回記入し、教職大学院全体の学びを振り返り全体を自己評価するものである。

二つめは、全授業科目を通して用いられる形式である。具体的事例については後に示すが、各授業科目における学びの前提を明らかにし、毎時間ごとの学修の最重要事項を受講者にまとめさせ、それに対して担当教師がコメントを加え内化と内省を促し、次時の外化につなげ、学修全体を振り返り自己評価を行うという形式である。

三つめは、教育実習の中で用いられる形式である。本学の教職大学院では、年間 200 時間余の実習をストレートマスター、現職教員双方に課している。そのとき、実習当日に何を行ったのかというような、ありきたりの事実を残していく実習録では、各自が持っている研究課題を広げかつ深めていくことは不可能である。

そこで、毎実習日ごとに自分の研究課題と関わって何がもっとも大切であったのかを書かせるとともに、疑問点や感想があればあげ、それに対して大学院の指導教員がコメントを加えるという形式を採っている。

上記、一つめと二つめの形式では一枚の用紙を用いている。三つめだけは、実習日ごとに一枚の用紙を用い一人一人の研修や学修前の実態を明確にし、それが大学院における学びによりどのように変容し、各科目や実習の履修後どこまで変容と成長をとげたのかを明らかにすることを目的として用いられている。

また、いずれの形式においても、院生が書いた内容に対して、指導に当たっている大学院の教師が毎回適切なコメントを与え、内化と内省を働きかけるようになっている。

以下、三つの OPPA の具体例をあげ詳細に検討してみたい。

☆ 大学院で学んだことについて、感想、意見など思ったこと、考えたこと、自由に書いてください。

この入学の当時は「僕にはいいかも大分なかな」と思っていた。思っていたが、やらなければいけないことから逃げることもあった。しかし、1年生の後期の授業は「現代教育論」で「教員になろうとしたきっかけ、教員としてのライフコース」を改めて考えること。自分の意識がかわれたと思う。教員になりたいと思っていた中学校、高校時代のことを思い出すこと。そして、教育実習と教師に出会ったこと。大学院の現職の先生方の人柄に感銘を受けた。教員になりたいという思いを再確認できたから。結果的にその意識は、教員採用試験まで、有難いことが続き、遅く合格することができた。もし、大学院に来なければ、まだ合格していなかったらと思う。 hindsight から、先生方が指導してくれたことが大きな要因だと思う。

今年の4月からは、想像以上の出来事が多々起こると思う。この学んだ知識や考え方を活かして、自分が出来ることを一つ一つ事にやってみよう。

学修の記録

この欄は、あなたが大学院修了時に、もっとも感銘だと思うタイトルをつけてください。

へむし、いいかげんね 大学生が 教職大学院に入学したら

自：2010年4月1日
至：2012年3月31日

学籍番号： _____
氏名： _____

図2-1 ストレートマスター (K. T.: 男子) の記入例、二つ折りにして利用する表面教員のコメントは未記入

【大学院入学時】

＊ 教職大学院で学ぼうとする、あなたの意気込みについて書いてください。

ここからの2年間、教員に必要な能力を、向上させるために、自分から積極的にかつ、一生懸命に頑張りたいと思います。

研究については、担当の教授の言葉を参考に、自分自身でしっかり考え、答えて導きだしたいと思います。

【1年修了時】

＊ 教職大学院1年間で学んだ、あなたの学習成果について書いてください。

1年間の学修を通じて、教員としての役割や責任、そして、教育現場での実践的な知識やスキルを身につけたと感じています。特に、授業実践の重要性や、生徒の個性に応じた指導の必要性を学びました。

【大学院修了時】

＊ 教職大学院で学んだ、あなたの学習成果について書いてください。

今年は、「教員採用試験」と「授業実践」の2つが大きな学習成果です。

まず「教員採用試験」については、見聞を広げ、教員としての責任や役割を深く理解できたと感じています。特に、面接や授業実践の経験が、教員としての自信や士気を高めることに大きく貢献しました。

また、「授業実践」では、問題解決力や、生徒の個性に応じた指導力を身につけたと感じています。特に、授業実践の経験が、教員としての責任や役割を深く理解できたと感じています。

※ 大学院入学時、1年修了時および2年修了時を比較してみて、あなたの何がどう変わりましたか。そのことについて、あなたはどのように思いますか。2年間の『学び』をふり返って自由に書いてください。

入学時と比べて、教員としての責任や役割を深く理解できたと感じています。特に、面接や授業実践の経験が、教員としての自信や士気を高めることに大きく貢献しました。

また、「授業実践」では、問題解決力や、生徒の個性に応じた指導力を身につけたと感じています。特に、授業実践の経験が、教員としての責任や役割を深く理解できたと感じています。

図2-2 ストレートマスター (K. T.: 男子) の記入例、二つ折りにして利用する裏面大学院修了時以降の教員のコメントは未記入

1. 2年間全体を通して用いる OPPA (学修の記録)

この形式では、A3版の一枚の用紙の表裏両面を利用している(図2参照)。教職大学院2年間を通して、入学した時の意気込み(図2-2右側の一番左欄)、1年修了時の成果と課題(図2-2右側の真ん中の欄)、および2年修了時の成果(図2-2右側の一番右欄)と課題を書く。さらに2年間全体を振り返って何がどう変わり、それに対して自分がどう思っているかの自己評価(図2-2右側の一番下の欄)する構成になっている。

図2からわかるように、院生が記入した内容に対して、教職大学院に関わっている全教員がコメントを記入し、院生の内省を深め、力量形成につなげていこうとするものである。

ここであげたストレートマスターは、大学院入学時の記述を見てもわかるように、書いている文字が大きくかつ内容も少ないし、とても院生が書いたとは思われないという印象が強い。しかし、1年修了時には劇的に変容している。本人の努力と教師の適切な指導が相俟って、こうした結果を生み出してきたと考えられる。余談ではあるが、この院生は教員採用試験にも、もちろん合格している。院生といえども、自己の変容に対して具体的内容を伴って可視的にすることの効果は大きいと考えられる。

ところで、この OPPA は、あくまでも2年間全体の展望と振り返りが主目的であるので、日常的な働きかけが難しい。そこで必要になってくるのは、毎授業時間毎に用いる OPP シートが必要になってくる。

2. 全授業科目を通して用いる OPPA (学修履歴の記録)

三種類の OPPA の中で、院生の資質・能力の育成にもっとも重要な役割を果たしているものである。この OPPA は、全授業科目を通して毎時間用いられ、教職大学院の科目を担当している全教員が院生の書いた内容に毎回コメントを付して返却し、先に述べた思考や認知過程の内化・内省・外化をはかり、資質・能力を育成しようとする意図をもっている。図3に院生が書いた具体例を示す。

院生の書いた学習履歴に対して、緑や赤および黒の文字の書き込みは、この授業科目を担当する研究者および実務家教員のコメントである。本大学院では、開講全科目が研究者および実務家教員の TT 方式で授業が行われているので、手厚い指導を行うことができる。

ここで用いられる OPP シートは、教師の授業内容が院生にどのように受け止め理解されているのか、授業を担当した教師が確認する評価の機能ももっている。つまり、学修履歴として院生が表現した「授業の一番大切なこと」が教師の意図した内容と相違があるかないかを判断する材料を提供してくれるからである。もし、両者が大きくかけ離れていれば、授業は適切でなかったということになる。ほとんどズレがなければ、授業の所期の目標は達成されていると考えてよい。

さらに、院生の書いた学習履歴を基に、理解が適切でなかったり、教師の意図が十分に伝わっていないと判断されるときなどは、次の授業の始めに内容を補足したり、再度内容を取り上げたりすることが行われる。それ以外にも、必ずしも次の時間でなくても、院生が以前に書いていた内容を以後の授業の中で取り上げたりするのに活用している。

このような使い方をすることによって、院生と教師の双方向性を高め、それによってお互いの内化・内省・外化が促され、学習内容の理解を深め、教師の指導における課題を克服することにつながっていく。少なくとも、授業結果を院生がどう受け止めたのかを毎時間の終了後即座に確認できることは、教師自身にとって内省を行う材料が得られ、それを次に院生に対して外化として働きかけるといった効果をもたらすことができる。

【授業に対して思ったこと考えたこと、自由に記述してください】

朝1限からの授業は大切でした。
評価問題の作成は難しかった。作りはなしの状態なので 改善して
使える形になればいいと思った。 *ぜひ改善して*
実習等で実施し、改善可能な点があればよい。
評価問題の作成は目標と深く関係する
目標と関係する点の評価はつくりやすい。

理数学力評価論 学習履歴

学籍番号

氏名

図3-1 「理数学力評価論」ストレートマスター (K. Y.: 女子) の記入例、三つ折りにして用いた表面

理数学力評価論学習履歴

氏名

受講前

1. 「学力は〇〇のようだ。なぜなら……（だから）。」という文を完成させてください。

学力は、記憶力が高すぎるからだ。なぜなら、3日坊主では、身につかないから。

2. 「評価は〇〇のようだ。なぜなら……（だから）。」という文を完成させてください。

評価は、総評がそのようだが、なぜなら、このように、
評価の総評が、結果を見ている。

回	月	日	今日の講義の中で、一番大切だと思ったことを書いてください。	受講後の疑問点等、あれば書いてください。
1	10	6	下の学身に学習しているからといって学力があるわけではなかった。正しく知識が身に付いていないわけでは	その知識が身に付いていないわけでは
2	10	13	問題解決において教えた通りに書いてしまうことがあ	その知識が身に付いていないわけでは
3	10	20	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
4	10	27	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
5	11	10	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
6	11	17	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
7	11	24	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
8	12	1	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
9	12	8	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
10	12	15	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
11	12	22	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
12	1	5	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
13	1	12	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
14	1	19	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。
15	2	2	知識を応用する問題について、利活用を目的として考えたのが大切だと思った。	利活用を目的として考えたのが大切だと思った。

受講後

1. 「学力は〇〇のようだ。なぜなら……（だから）。」という文を完成させてください。

学力は、記憶の身長が高すぎるからだ。なぜなら、それら正しくは、難しいから（アバウトに、（わり）

2. 「評価は〇〇のようだ。なぜなら……（だから）。」という文を完成させてください。

評価は、その人の親のようなものだ。なぜなら、それらも、その人の変化を見ているから。

受講前・中・後をふり返って、何がどのように変わりましたか。そのことについて、あなたはどのように思っていますか。考えたこと、感じたこと、感想など、何でも構いませんから自由に書いてください。

受講前、学力評価・評定のちがいがわからず、区別ができていなかった。受講後は全てちがうことがわかった。
また、テストの点数と上記の3つについて区別ができていなかった。
学力は、テストで現れるものではない。それを測るために、評価問題を考えた学習感想やOPPを使うなど
工夫する必要がある（難しい...）
「測る」という存在は、若干抵抗があるから... H.

図3-2 「理数学力評価論」ストレートマスター（K. Y.: 女子）の記入例、三つ折りにして用いた裏面

3. 教育実習において用いる OPPA (実習履歴の記録)

本学教職大学院では、教育実習にも OPPA の考えを導入している。厳密に言えば、教育実習で用いる OPP シートは、これまで述べてきた2年間を通してあるいは授業科目の中で用いるシートとは若干異なっている(別添資料1、35~39頁参照)。教育実習で用いるそれは、実習日毎に図4に示した一枚の用紙を用いている。

これをみれば明らかなように、実習生がもっている研究課題と関わって、その日の実習の中で実習生が最も重要だと考えたことを書かせるようになっている。それに加えて、実習の中で疑問に思ったことや質問事項などを書く欄を設けるとともに、大学院の指導教員の所見を書く欄がある。実習が終わった当日に、実習校や大学院に戻ってからの指導はもちろん行われる。それだけでなく、上のシートに見られるように院生の疑問点や質問事項を大学院担当の教員(図4の例は研究者教員と実務家教員)が回答するようになっている。

図4に示したように、実習で用いる OPP シートは三つの欄から構成されているので、他の二つのシートと異なっているのは、全実習が終わっても一枚の用紙にならず実習に行った日数分の枚数になる(学修中の内省)こと、実習前・後は実習に対する心構え(予見的内省)と実習から学んだこと(遡及的内省)というように、書く内容が多少違うことである。最後に全体を振り返って自己評価(遡及的内省)も行わせている。したがって、このシートは、いわゆるふつうのポートフォリオ評価といえる。

教育実習で用いるシートも OPP シートであると考えたのは、以下の二つの理由による。

一つは、実習生がもっている研究課題と関わってもっとも重要だと考えた実習履歴を書かせているからである。学習者が書いた実習履歴に対して、大学の指導教師が適切なコメントなどを与えることによって実習生の抱えている研究課題に迫ろうとしているのは、OPPA の基本的な考え方に他ならない。

もう一つは、毎回一枚の用紙を用いているからである。

教育実習では、これ以外にも、もちろん実習生が各自記録を残しているのだが、その形態は特に指導していない。要は、あくまで実習生自身の研究課題と関わって、それをどう深め、考察していくのかという点を重視しているのである。

おわりに

本稿では、OPPA を中心にして教職大学院生の実践的力形成の取組の一端を検討してきた。紙数の関係から意を尽くし切れず、取組の概要について説明したにすぎない。二年間にわたって、三種類の OPP シートを資料として蓄積できたので、それらを分析し、課題が適切に解決できているかどうか、あるいは新たな課題は何かという考察は今後の課題としたい。

(附記) 本稿で紹介した三種類の OPP シートおよび原稿のたたき台は、OPPA の開発者である堀が作成した。本稿は、堀が作成した原稿を共同執筆者の加筆修正のもとに作成している。

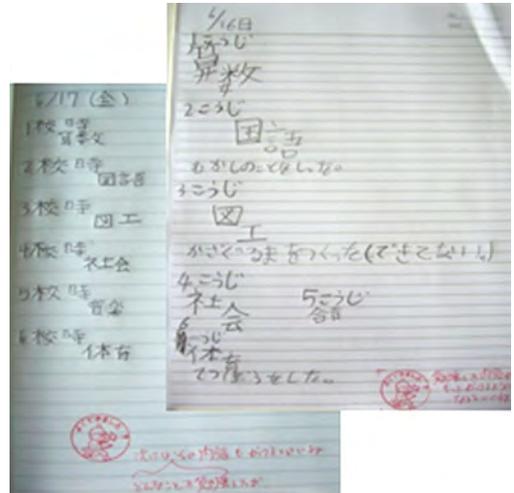
平成23年 6 月20日(月)

【あなたの研究テーマと関わって、今日の実習で最も大切だと考えたことを書いて下さい。】

14日にアナウンスしておいた「自主学習ノート」のいよいよ開始の日となりました。記念すべき初日。本日の始業前活動はグラウンドでの「外すく」だったわけですが、おはようハイタッチ（児童総会で決定したあさのあいさつ運動の一環）をする児童の口々から自主学習のことが話題に出されました。「先生！俺



やってきたよ」「先生！私全然書けなかった」「先生！おれのノート大丈夫かな？」「先生！俺のノートの表紙みて。（左写真）」等々、児童の反応は上々でした。一つの活動に対するこういった前向きな姿勢にやはり感心します。（中学校ではこううまく動き出しません）それでもチェックをすると6人の忘れがありました。担任の指導が入ります。右の2人のノートが印象的です。彼らのこのノートの背景（彼らの言語活動に問題があるのか、はたまたそれぞれの授業のポイントが焦点化されていないのか等）を探るとともに、このノートが1冊終了するとき



の学びにどんな変化が起きるのか、また授業や学習そのものに対する意欲は喚起されたのか、そしてノートにはどのように表れるのか。そんなことを楽しみにしながら、クラスの児童に関わっていきたいと思います。とかく、〇〇ページの□□をやりなさいという選択や自由度のない宿題をだすことが我々教員の通常なのですが、この自主学習はそんな「宿題」というものに対する1つの問題提起でもあります。児童が嫌にならないように、しかし継続していけるような指導をと心がけていきたいです。

【疑問点、質問などがあれば書いて下さい。】

「とりえず1ページにまとめましょう」ということで始めたわけですが、「先生、2ページとかやってもいいの？」という質問も出ています。どのように展開していくことが望ましいでしょうか。ご示唆いただければと思います。

【指導教員の所見】

学校の教師は、とかく具体的な指示を出しがちなのですが、これが結構子どもたちの可能性を摘み取っているのかもしれない。大きな枠はありながらも自主性がかかなり出せる、こういう指示が求められているのだと思います。自立するためには、学習目標を持てるようにすることと自己評価を適切に行えることがとても重要であると考えられます。ページ数にしても、出来ればどんどん書いて良いけれども、決して無理をしないようにすることが大事でしょう。とにかく、短くてもよいから長く、楽しく続けられることが一番大切なのではないでしょうか。（堀）

振り返って見ますと、担任が出来た終盤の8年ほど、「復習ノート」と名付けて同様な実践をしてきました。スタートは、高学年を担当した時、どうしても学習の成果が見えてこない児童への対応としての手立てとしたのです。日常的な活動では能力が不足しているようには見えません。では、なぜ？どうしたら、良いのか？まず、取り組んだのが、数名の児童の母親に、一日の学習の内容を聞き、ノートに記録して届けていただくことにしました。児童には、家で話すようにと伝えました。このときのルールが大切です。基本的には、問い詰め型の対応は厳禁です。この結果、学習成果が上がらない理由がすぐわかりました。それは、授業終了と同時に学習内容は、頭の中から完全に消えてしまっていたのです。児童が、全く学習の必要性を感じずに過ごしてきたのです。このほか、児童の学習結果と、その定着について、いろいろの事が解明できました。

やがて、1ヶ月ほどで、次第にノートの記述量が増えてきました。授業への参加態度も一変してきました。話の聞き方が良くなり、積極的に参加するようになってきたのです。学習量が少ない小学校では、すぐに成果となって現れてきました。

児童は、さらに、自分なりの学習の方法を会得できたのです。自ら学ぶ方法もわかってきたのです。次第に自分で書くようになってきました。当然意欲も向上します。これを見ていた、他の児童が、書いてくれば見てくれるか？ということになり、学級全体のものになりました。そのことによって、宿題は特別の時以外は、「無し」にしました。この実践から、思わぬ成果がたくさん得られました。実習の時、提示します。ノートは資料としていくつか手元に残してあります。（仙洞田）

図4 現職教員（T. A.：男子）の教育実習におけるOPPシート記入例

(引用・参考文献)

堀 哲夫, 2009. 「学習履歴を中心にした大学の授業改善に関する研究－OPPA を中心にして－」『教育実践学研究』14、64-71.

Hori Tetsuo, 2011. The Concept and Effectiveness of Teaching Practices Using OPPA, *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, 6, December, 47-67.

Van Manen, M. 1995. On the epistemology of reflective practice. *Teacher and Teaching : Theory and Practice*, 1 :33-50.

Schön, D. A. (佐藤 学・秋田喜代美訳), 2001. 『専門家の知恵』東京：ゆみる出版.

【実習前】

平成 23 年 5 月 5 日（木）記入

【あなたにとって教職大学院の学校・授業改善プロジェクト実習とはどのようなことだと考えますか。】

- ・ 1 年目の研究を実際に実践に生かす実習にしていく。課題研究はもちろん、授業で学んだことを実際に生かす。
- ・ 実習が所属校に還元できるものでなければならない。自分の授業や実践により所属校がよりよい姿になっていくことを展望したい。
- ・ 実習したことが所属校だけでなく、山梨県全体にひろげていけるものにしたい。

平成 23 年 10 月 27 日 (木)

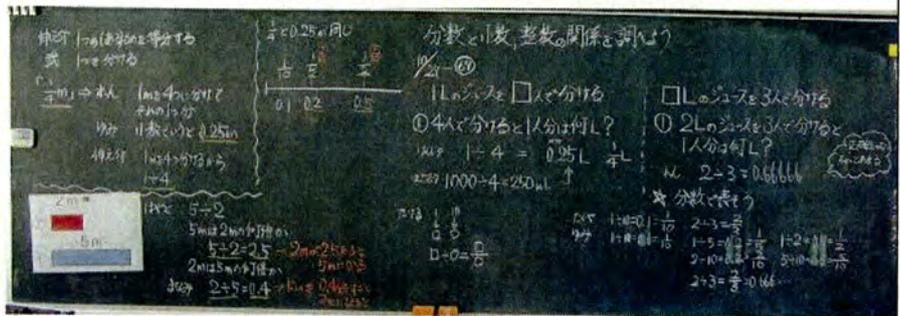
No. 19

(本年度の研究に係わる部分は「分数と小数がむすびつくこと」この部分に係わる記述には☆印をつけた。)

☆導入場面では、これまでの学習を振り返りながら、わり算と分数、小数には関係があることを意識させようと考えていた。子ども達は、担任が思っていたよりも分数と小数が結びついてきた。ただ、一部の子が発言によって授業が進行していた。発言の少なかった子については、今後、個別指導も含めて、単元全体の中で、わり算と分数、小数が結びつくように学習させたい。

☆導入場面で扱った「2mを1とみたとき、5mは、2.5倍にあたる」ところは、本時の指導においては、子ども達の意識の中で関連をさせずらいところである。これについては、第2時(今回は3時)で指導する分数倍の学習のはじめに再度扱うことで、「分数のよさ」にふれることができると思う。

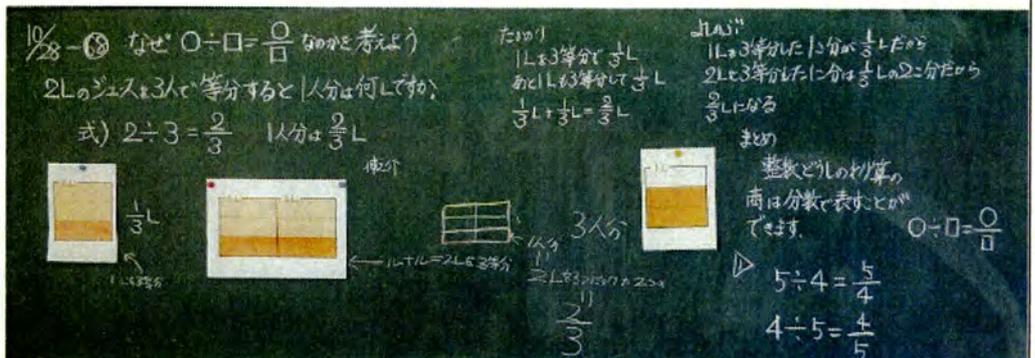
☆本時の学習課題の中心である $2 \div 3$ を分数で表す場面では、自力解決をおこなっている子が少なかったため、早めに話し合いに入った。伸之介君が図でおこなっており、机間巡視において、説明をきいた。図を使いながらしっかりと説明できていたが、伸之介君以外にも $2 \div 3 = 2/3$ としていた児童がいたので、伸之介君の意見を最後にして、子ども達にわかりやすい帰納的な意見から取り上げることにした。



☆子どもたちが帰納的に解決した原因として、導入の際、様々なわり算、小数、分数をあげたことかもしれない。もっと簡単にすべきあったか。ただ、子ども達には、わり算と小数と分数が結びつくこと意識させることは、分数を数と見なせるようにするためにも大切だと思う。

☆2時は右の板書である。

図を使って違った表現方法で $\bigcirc \div \square = \bigcirc / \square$ を説明していた。図をあらかじめ示し、図を使って考えさせるように指示した。



【疑問点、質問などがあれば書いてください。】

2時では $\bigcirc \div \square = \bigcirc / \square$ の根拠を理解してほしかったので、図を提示して、図で考えさせました。1時も子ども達に自由に解決させるより、図を示した方がよかったですでしょうか。

【指導教員の所見】

図の有効性があります。2÷3を1/3か2/3かという議論では、図で示すことで2/3になることの意味が分かることがあります。学力調査の授業アイデア例でも図を使っています。それも参考にしてみてください。ここも数直線は使えるかを考えて下さい。

【実習後】

平成 23 年 2 月 24 日（金）記入

【あなたにとって教職大学院の学校・授業改善プロジェクト実習とはどのようなことだと考えますか。】

- ・振りかってみれば、普段の仕事に追われ、文献を読みながら、研究をふかめることができなかつた。実習シートももっと文献を参考にして、P（文献などを参考にしながら実習の計画を立てる）→D（授業で実践する）→CA（自分の授業を振り返り、文献実習シートに書き込み、対応策を考える）
- ・自分の研究を深めつつ、教職大学院と学校が協力して、学校の研究を深めていくことが実習だと考える。
- ・本実習では、中村先生に本校の校内研究に携わっていただいた。模範授業をしていただいたり、授業研究で多くの助言をいただいたりした。本校の先生方から「たいへん勉強になった」という成果をいただいた。
- ・大学院の学生は教職大学院と実習校の仲介役を積極的におこない、みずから学校の研究に積極的に参与していくことが大切だと思われる。本年度、私は研究副主任として、仲介役をおこない、1 学期に校内研究の提案授業をさせていただいた。授業としては、あまりよいものではなかつたが、校内研究の提案として 1 つの投げかけになったと思われる。
- ・一番よいのは、教職大学院と学校が連携して取り組む課題と自らが持つ研究課題がマッチして、合同に取り組むことがベストだと思われる。本年度はそれに近い実習ができたとおもわれる。

自己評価：実習全体をふり返って】

平成 24 年 2 月 24 日（金）記入

【実習前・中・後を比較して、あなたの何が、どのように、またなぜ変わりましたか。変わったことについて、あなたはどのように思いますか。自由に書いてください。】

- ・実習前にもっている考えを本年度は実行できたと思う。
- ・本年度の研究は、昨年度で大学院で学んできたことをもとに授業において研究をすすめてきたが、様々なところで提案する中で研究が深められたと思う。「世の中に問うこと」は世の中に影響を及ぼすことができると思うし、自分にも大きな学習になる。
- ・清水美憲先生がおしゃっていた「研究は、憤りからはじまる。」をいつも頭にある。児童があまり定着していないこと、教師の教え方を変えた方がよいところを、自分の教師活動も振り返りながら研究をすすめていきたい。
- ・年間を通して数直線をあつかってきたが、小数の乗除法にみられた誤り、単位量あたりの学習で見られた誤り、割合の学習で見られた誤りを整理しておく、今後の指導に役立つ。
- ・今後の研究課題として
子どもが「1」とみなす方法を見抜く力を育てる指導について考える。
学習感想の活用法
などである。